

御挨拶

私事、此度京都大学アメリカンフットボール部監督を交代する事と致しました。この10余年、多くの方々には京大フットボールはどうなったんだ。何をやっているんだと思われたことでしょう。しかしその間もコーチや選手は一生懸命取り組んでいました。

私学の場合、スポーツは教育の一環であり大学経営の一部です。大学が環境整備し、指導者を雇い、チームが望む優れた運動選手を多数入学させるのは大学の事業だからです。ただ大学はチーム運営は素人であるためOB会に依託しているというのが実情でしょう。大学は株主、取締役会がOB会という仕組みがはっきりできているわけです。しかし京大の場合、大学は練習場を使わせてくれる以外は何もしてくれません。基本的には好きな者が集ってやっているだけです。しかし今選手がフットボールができるのは先輩達が積上げてくれたものがあるからであり、OB会、後援会をはじめ多くの支援があるお陰です。今の選手には次に引継ぐべき守らねばならないものがあるのです。そう見ると京大アメリカンフットボール部はきわめてあいまいな組織であり強いて何が主体かといえば選手としか言えないでしょう。ですから選手が居なくなれば関係者がいくら頑張った所で何もできません。

以前から我チームの場合、初めから入部を希望する者は殆ど居らず、入学者を勧誘して集めるのです。誰でも大歓迎。当然大半はトップレベルでスポーツをするには程遠いので辞める者も多く、残るのは2割程度でした。そのため3,4回生でプレーする者はある程度の運動選手で、やる気の強い者達でした。しかるに10余年前から学生の体育会離れにより入部者が激減し、それは量的にも質的にも大きな変化をもたらしました。基本も身につけていない下級生を多数試合に出場させるため、チームとしても、やる事のレベルを下げざるを得なくなりました。退部率は低下したが辞められると困るからと厳しさを求めなくなった結果が京大流を貫きにくくなったことをもたらしました。

京大流はどんな時でも勝利を目指す、なんとしてもチームを勝たせる人間になる。そのために今の自分ではダメだという自己否定に立って、今の自分を超越る、自分を変える、即ち自分との闘いをやり抜く。そして試合では、たとえ負けると分かっている試合でも最後まで闘い抜く。そうすればチャンスが生まれる事がある。しかし負けるといふ闘いを闘い抜くのはバカにならないとできないことであり、それには自分を超越なければなりません。要するに肚をくくるのです。人間一度肚をくくる事を覚えると一生くくれるものです。それは立向う楽観主義をもたらします。これは一生の財産です。どんなに優秀なコーチでもフットボールを教えるだけでは京大でチャンピオンはあり得ません。ある意味でフットボール以前の方が大きい。これが京大流です。本気で真剣に自分に立向うと自分が変わる。この発見は大きな喜びです。もっとやろう、とより気持ちが強くなる。どんどんエスカレートして、やがて勝つためならどんなことでもやる。自分はどうなってもよい。損得なし。いわゆる熱中する、のめり込むようになる。その時はしんどいけれど

こんなに楽しい事はありません。これが小生が藤村先輩から受継いだ教え、情念のフットボールです。

今年はメンバーも一応は整い、具体論と共に京大流の復活ができると思ってスタートしました。ずっとそれを説いてきたつもりであったが、前半4戦でそれが全く浸透していない事がわかりました。選手は負けられないための普通のフットボールを努力していたのです。そして前半で優勝の目は無くなり、やっと小生の言う事に気付いたようです。とたんにチームは生れ変わり、後半見違えるような闘い振りで試合毎に力を付け最終関大戦で大勝するまでになりました。最初からやっておれば、シーズンを通して成長していたら、結果は全く違ったものになっていただろうと思うと残念でなりません。常に説いていても選手に全く伝わっていない。負けて初めて皆が気付くのでは指導者失格です。

京大流を指導するために不可欠なもの。こうしろと言ったら鬼となってやるまでとことん付き合う体力です。65才を越えた頃から体力の劣えを感じ、誰かにバトンタッチをと考えてきましたが、京大流のやれないチームを引継ぐわけにはいかないと悪戦苦闘してきました。その間共に闘ってくれた四回生には心からよくやってくれたとねぎらいたいと思います。

来年は戦力も一層充実し、皆京大流を覚え、心おきなくバトンタッチできる状態になったと思われるので西村大介に替ってもらう事にしました。思えば京大入学以来51年、藤村先輩に巡り合った事がフットボールにのめり込むきっかけでした。以来具体的には常に新しい事を追い求めてきましたが、心情はずっと藤村先輩を追いかけてきた気がします。

俺も藤村先輩のような格好良い男になりたい、思えば自己主張のためだったように思います。しかし1982年藤田俊宏君が亡くなった事で初めて自分のためにフットボールをしてはいけない、彼の手前も自分は人生を捧げなければならない、チームが求める限りチームのために生きたいと思うようになりました。それ以来小生はずっと100%選手のための監督であったと思っています。又それをやらせて頂いたのは、共に闘ってくれた選手達や、クラブハウス建設にお力を賜った樋口廣太郎様をはじめ多くの方々のお力添えのお陰であると改めて感謝申し上げたいと思います。

いまでもチームのために力になりたいとは思っておりますが、監督とは選手にやれというに止まらず、首根っこを押さえつけてでもそれをやらすのが役目です。これは体力勝負であり、今それができなくなったのであれば任に非ずと思ひ、バトンタッチをする事と致しました。

もっとも、まだまだ教える事は多く、現場が望むなら力になりたいと思っています。

今は京大アメリカンフットボールにとっても、自身にとっても一つの区切りと思っております、永い間、お世話になった皆様には心から御礼申し上げる次第です。最後になりましたが、京大フットボール部への一層のご理解と共に今後共引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

2011年12月 水野 彌一